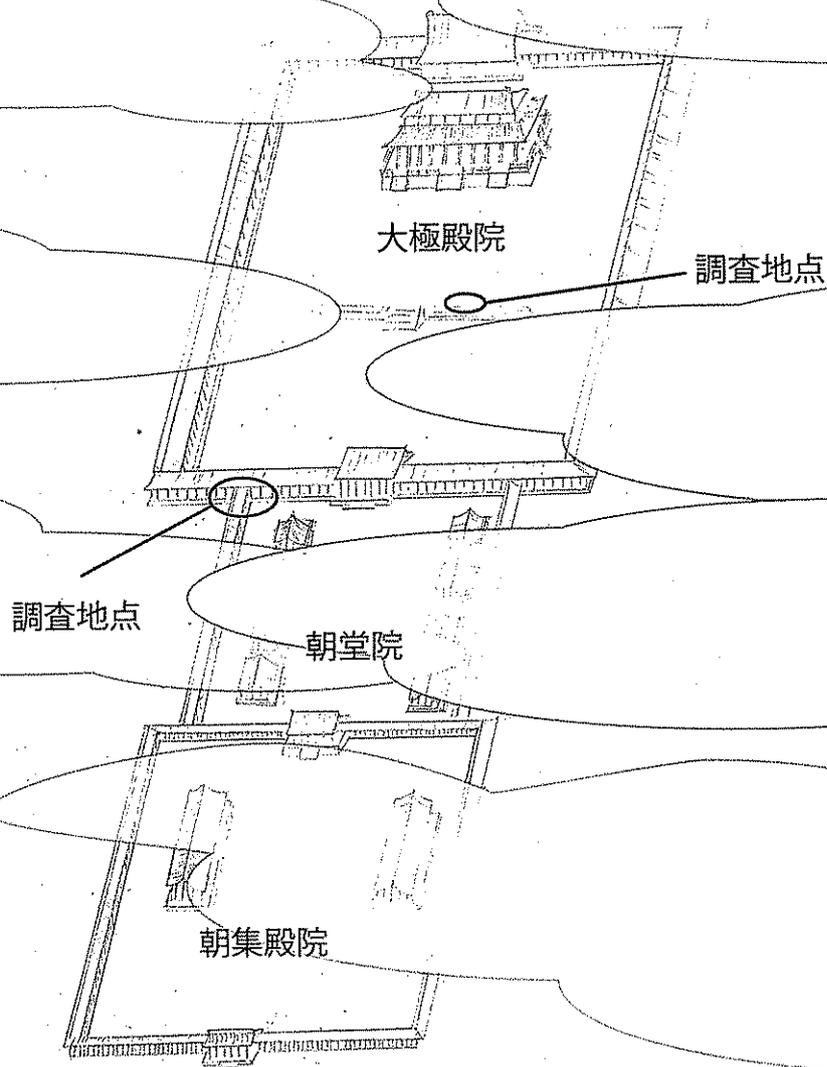


平成22年度
くにきゅうあと
恭仁宮跡発掘調査
現地説明会資料



恭仁宮跡推定図(南東から望む)

京都府教育委員会

平成22年10月30日(土)

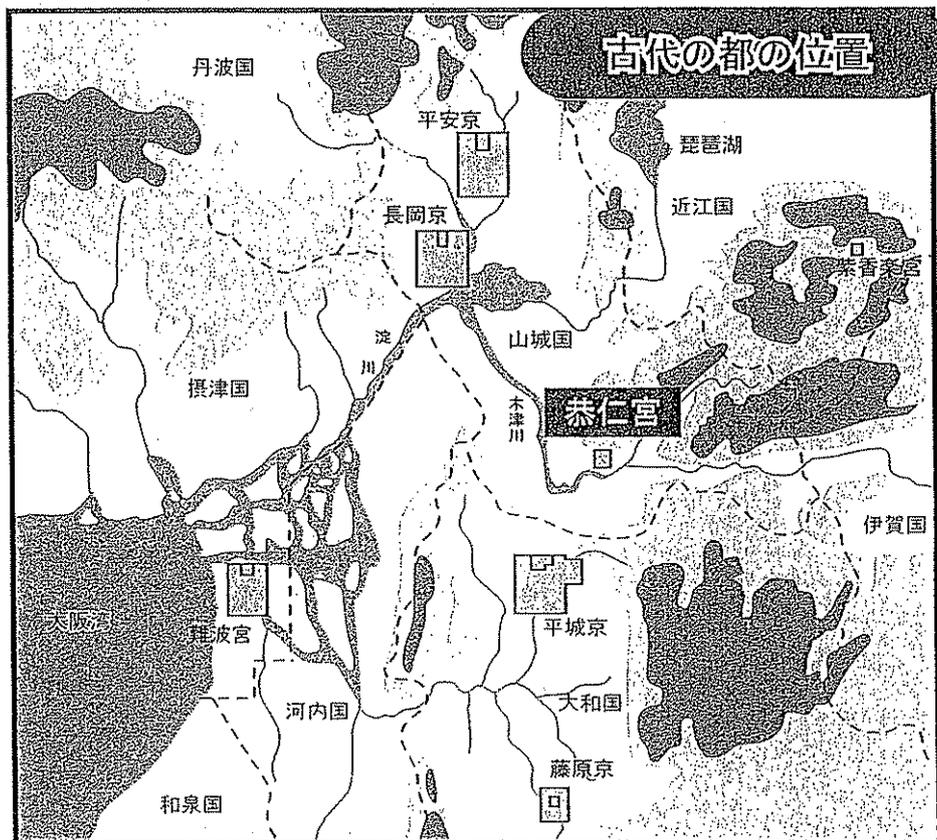
はじめに

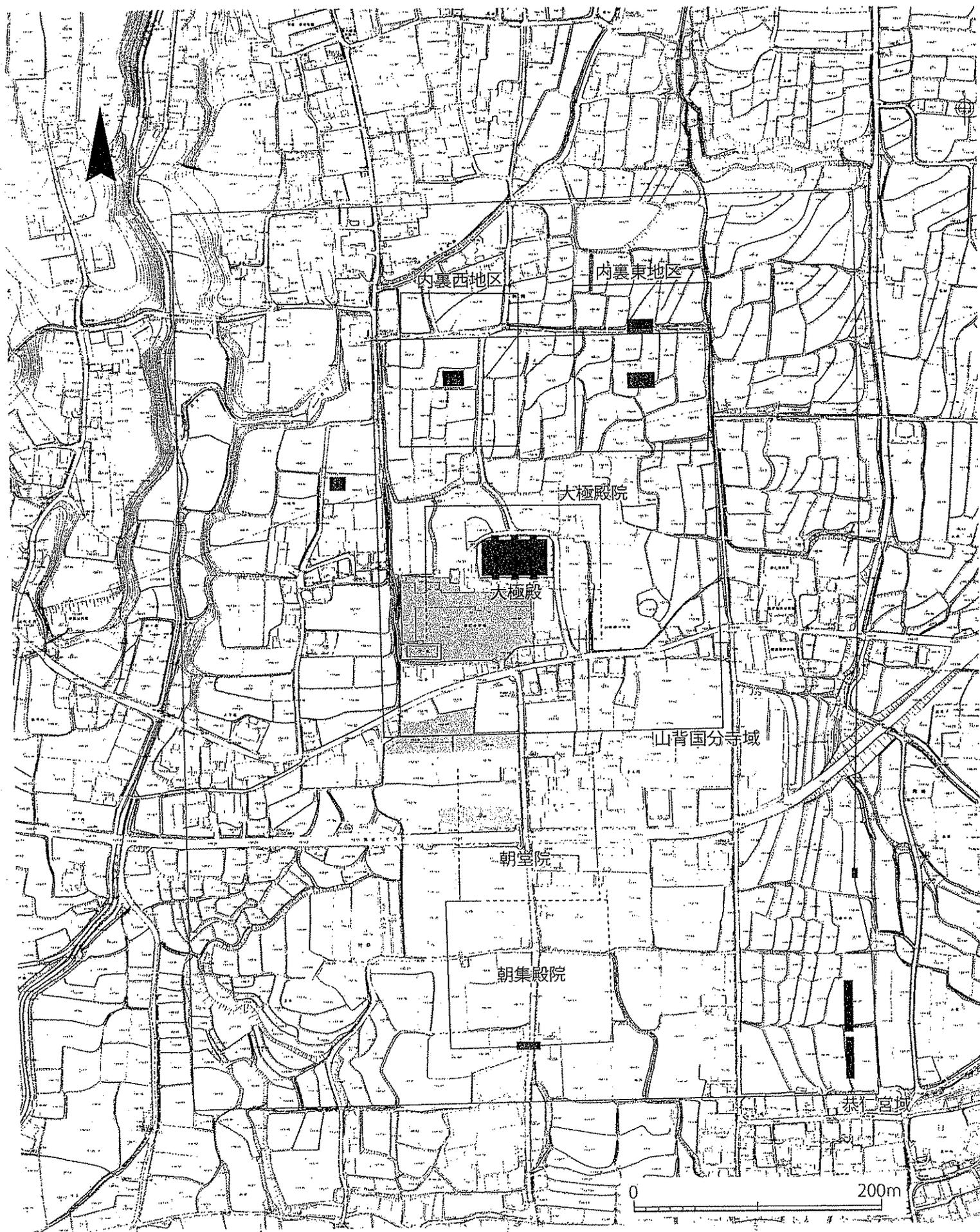
京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年に首都が東京に遷るまでその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「恭仁京」、その中心となるのが、加茂町瓶原の地に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などが行われた大極殿や朝堂院、さらには役人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。





第1図 恭仁宮跡全体図及び平成22年度調査対象地位置図(1/4,000)

これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実態が少しずつ分かってきました（第1図）。

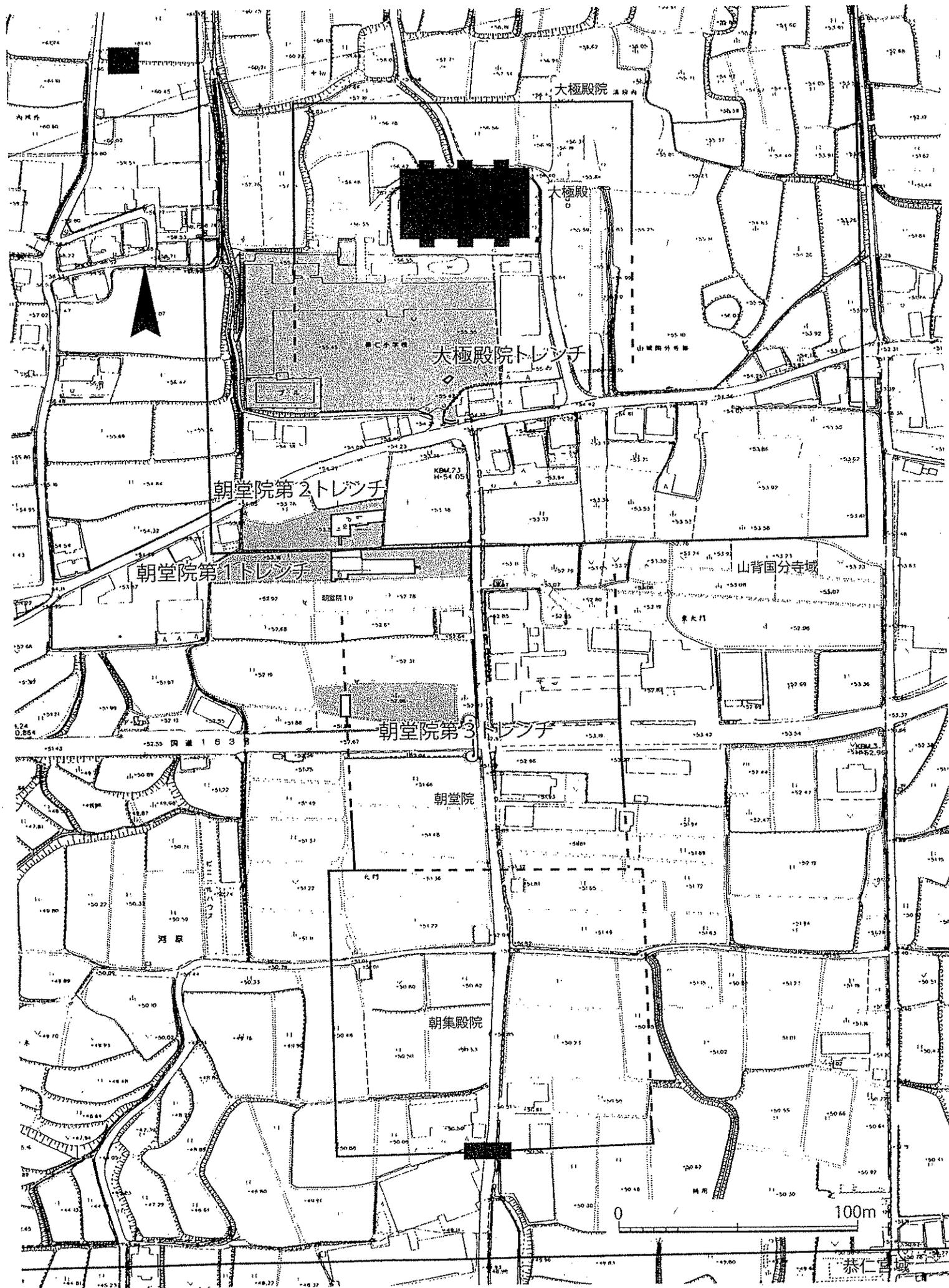
恭仁宮は東西に約560m、南北に約750mの大きさを設計され、その周囲は背の高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1m以上の大きな土壇の上に築かれた東西が45m、南北が20mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によって分かりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代のことを記録した『続日本紀』という歴史書には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」を恭仁宮へ移築したことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿跡や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿院の北側には、内裏が設けられていました。恭仁宮跡では、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいますが、このような施設の配置は、恭仁宮だけの独自のもので、どちらが天皇が住まいした内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）で、残る南側、東側、西側は土塀（築地塀）で囲まれた、東西約109m、南北約139mの大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

朝堂院・朝集殿院では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集殿院は、東西約134m、南北約125mの規模で、南側の朝集殿院南門が見つかっています。朝堂院は、朝集殿院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。このことから、恭仁宮が平城宮を手本として造られた可能性があることもわかってきています。



第2図 平成22年度トレンチ配置図(1/2,000)

平成 22 年度の調査で分かったこと

○大極殿院地区トレンチ（第 3 図）

「大極殿院地区」では、大極殿の前庭にあたる現在の恭仁小学校のグラウンドと、その南側の宅地部分との地形上の段差が、恭仁宮の時期まで遡るものであるかを確認するために調査しました。

大極殿院では、これまでの調査によって大極殿と大極殿院回廊の北辺と西辺が見つかっており、その東西が 480 尺（約 142m＝当時の物差しは約 30cm ですので、柱間の距離はその倍数）であることがわかっていましたが、南辺は確認されておらず、南北の正確な長さは不明でした。

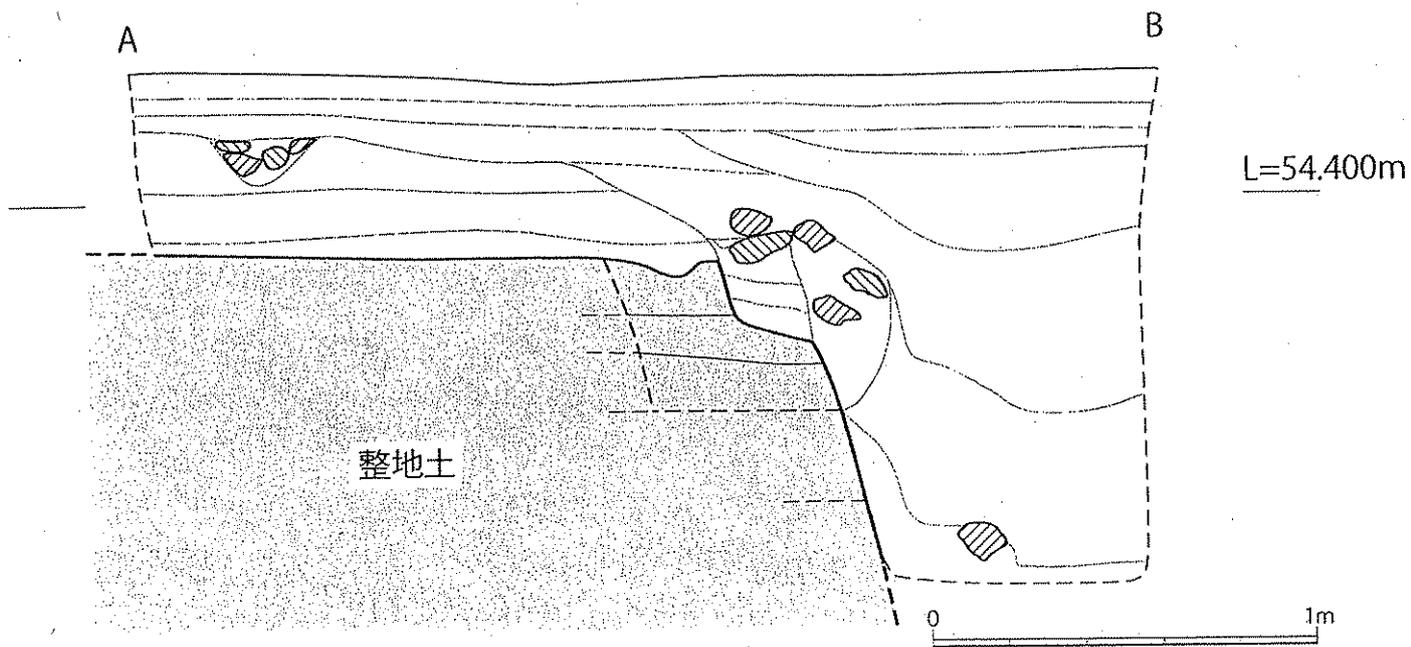
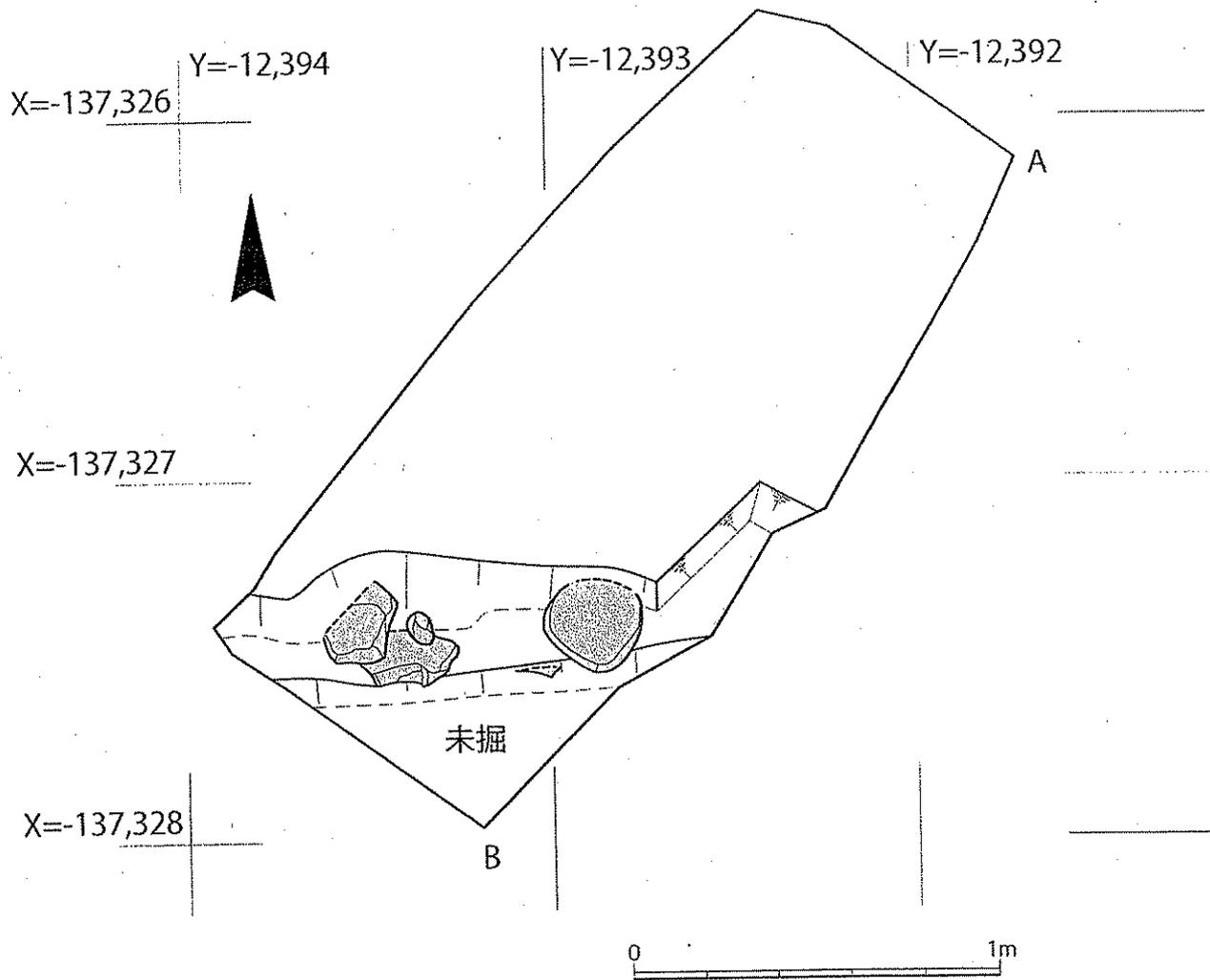
大極殿院の南北規模を推定する手がかりの一つとなっていたのが、現在も恭仁小学校の校門付近に残る地形上の段差でした。調査の結果、鎌倉時代以前に盛られた 1 m 以上の高さの盛土層を確認しました。この段差の端は、大極殿院の北面回廊の中心から 395 尺南の位置にあることが明らかになりました。朝堂院トレンチの成果とあわせ、大極殿院の構造を考える上で非常に重要な成果となりました。

○朝堂院地区トレンチ（第 4 図）

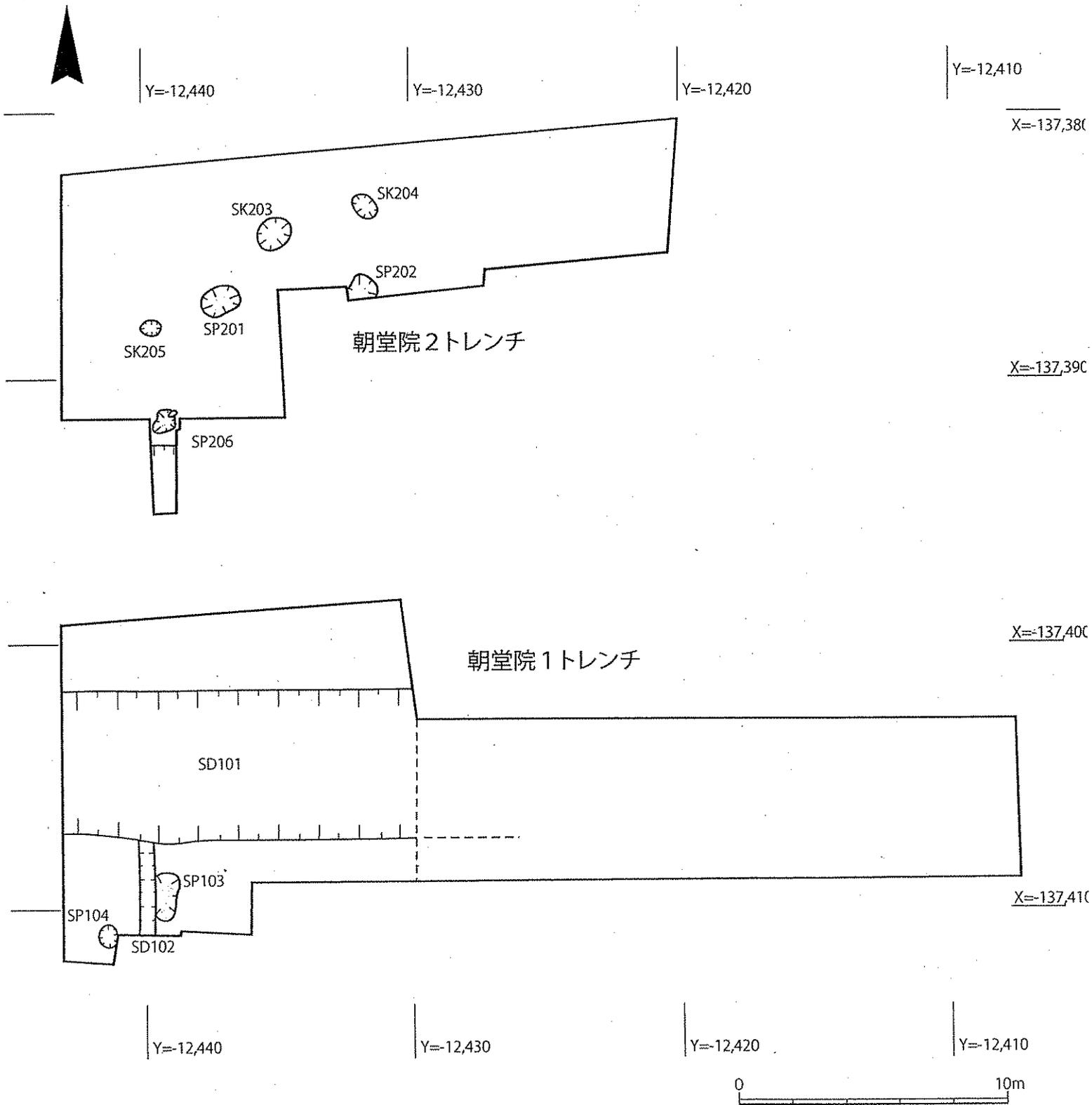
昨年度の調査で、朝堂院の西辺区画の位置を確認し、恭仁宮内の区画としては、大極殿院と朝堂院の接点を残し、ほぼ確定することができました。そこで、今年度は、朝堂院の区画がどこまで北へ延びるのか確認するために、朝堂院地区に 3 か所のトレンチを設けて調査を行いました。ここでは、特に成果のあった 2 か所のトレンチについて説明します。

第 1 トレンチでは、昨年度確認した朝堂院の南辺の柱穴から北へ 420 尺の位置で柱穴 S P 103 を確認しました。朝堂院の区画施設である掘立柱は 10 尺等間で並んでいることがわかっていますので、門などの施設がなければ、南から 42 本目の柱の位置にあたります。

この柱穴からさらに 60 尺北側の柱穴 S P 206 が、第 2 トレンチで見つかりました。この 2 本の間にあつたはずの柱穴は、恭仁宮の後にこの地に建てられた国分寺の溝や築地などの造成によって失われたのか、今回の調査では、見つかりませんでした。



第3図 大極殿院トレンチ平・断面図 (1 / 20)



第4図 朝堂院トレンチ検出遺構配置図(1/200)

第2トレンチでは、東西に約4.5m(15.5尺)離れて並ぶ2基の柱穴SP201とSP202を検出しました。これらの柱穴は、深さ約5cm程度の浅く不整形な柱穴で、平成19年度の調査で確認された大極殿院回廊の礎石を据えるために掘られた穴と形状がよく似ています。このため、大極殿院回廊の北西隅から東へ4本目と5本目の柱穴との距離や角度を確認したところ、ちょうど対になる位置に、今回の柱穴SP201とSP202が位置していることがわかりました。位置や形状から、この2基の柱穴は、大極殿院の南面回廊の柱穴である可能性が高いと考えられます。

まとめ

今回の調査では、大極殿院側も、朝堂院側もそれぞれ柱穴2基しか見つかりませんでした。SP201とSP202がそれぞれ大極殿院北面回廊の柱と対になる位置にあること、SP103とSP206が朝堂院の南端からそれぞれ42本目と48本目の柱にあたる位置にあることが重要で、これらの柱穴が、大極殿院の南辺と朝堂院の西辺の接点である可能性があると考えられます。

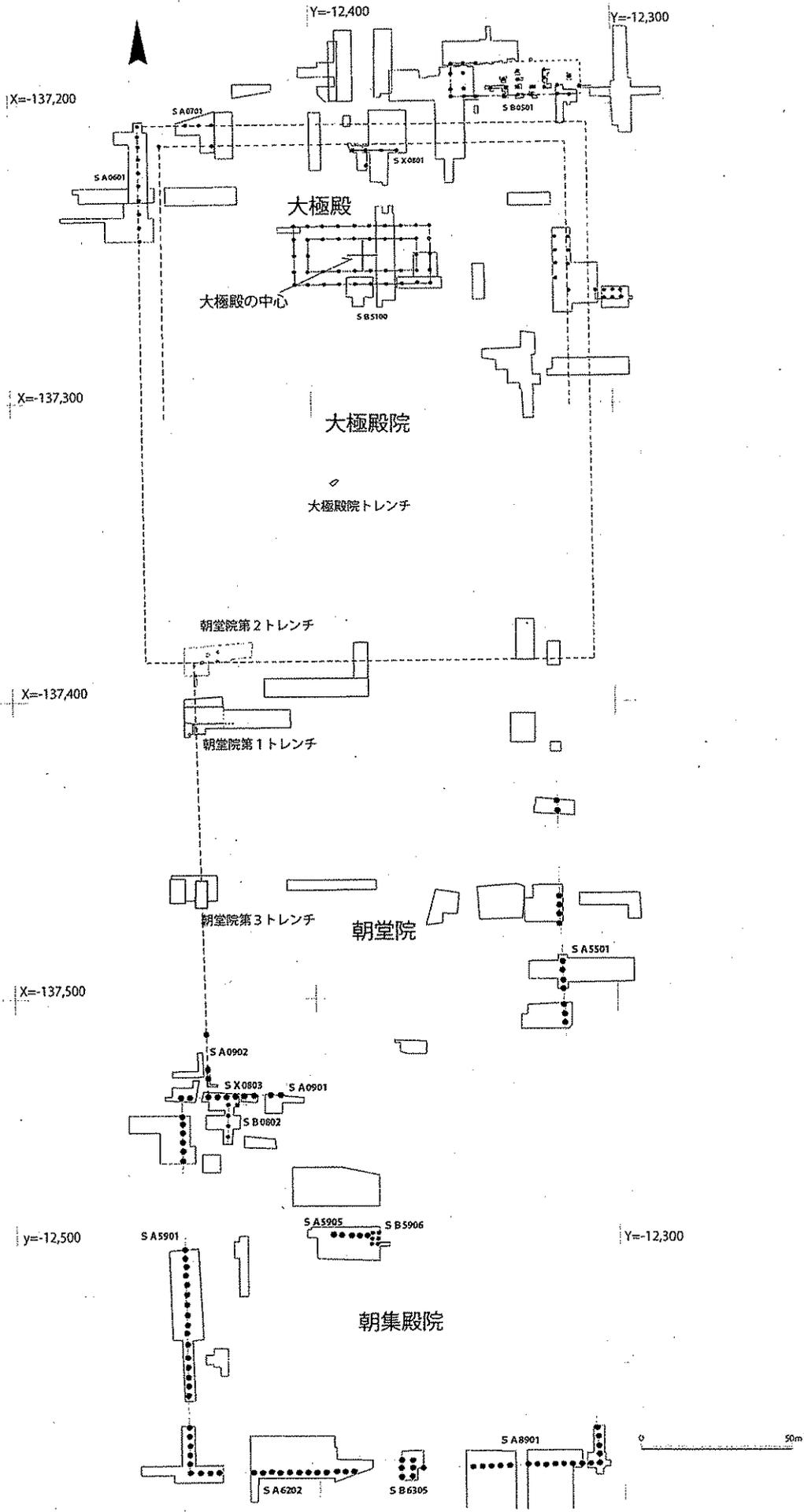
この成果から、新たな復元案として、大極殿院が東西480尺、南北580尺の規模で設計された可能性が指摘できるようになりました(第5・6図)。

恭仁宮の大極殿院については、平城宮の大極殿と大極殿院回廊の一部を解体して恭仁宮へ運んだという記載が、『続日本紀』に残されており、大極殿はその記載のとおり、平城宮からそのまま移築されたことが発掘調査でも確認されています。

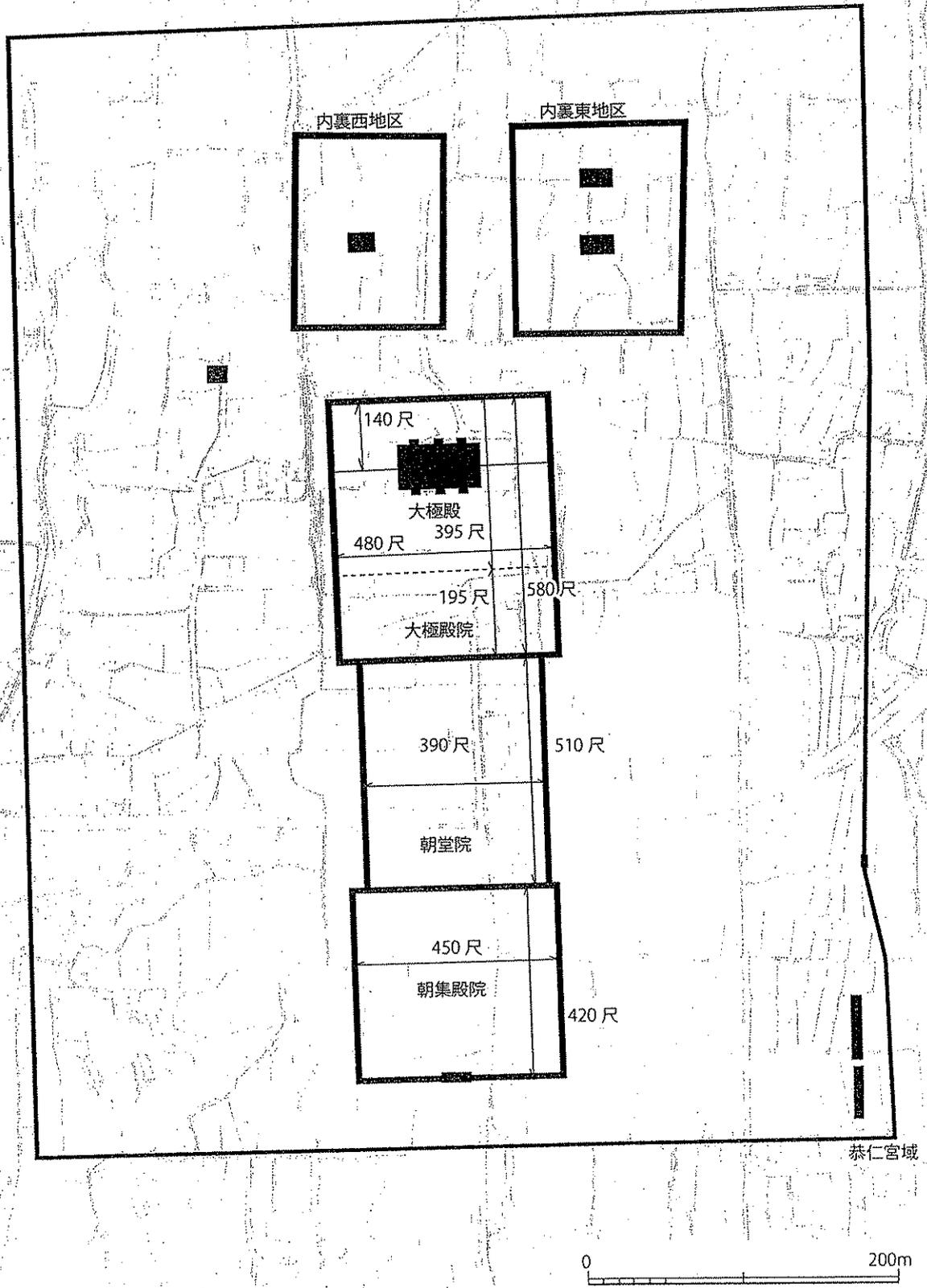
大極殿院回廊についても、平城宮跡の調査で確認された回廊の柱間の広さなどが恭仁宮のそれと同じであることが、すでに確認されています。平城宮の回廊については、少なくとも2160尺分が解体されていることが、発掘調査で確認されていたのですが、今回の調査では、それにほぼ相当する2120尺分の長さの回廊が、恭仁宮で築かれていた可能性があることもわかりました。

また、新たな復元案によれば、大極殿の中心から回廊の北までと、南までの距離の比率が、平城宮の中央区大極殿院とほぼ同じとなることも分かり、恭仁宮の大極殿院が、平城宮の中央区大極殿院を手本としていた可能性があることもわかりました。

昨年度の調査において、朝堂院と朝集殿院の区画のあり方が、平城宮の東区



第5図 恭仁宮跡検出遺構復元想定図 (1 / 2,000)



第6図 恭仁宮跡復元想定図 (1 / 4,000)

と似ていることがわかっていますので、恭仁宮の設計は、平城宮の中央区大極殿院と、東区朝堂院・朝集殿院の区画の様相を併せ持つ設計であった可能性があることもわかりました。

ただし、今回の調査だけでは確定に至らない、いくつかの問題も残されました。今回の復元案では、大極殿院が南北に長い 580 尺の設計であったこととなります。大極殿院が南北に長くなると、実際に役人が政務をとったと考えられる朝堂院の規模が非常に狭くなります。昨年度の調査によって、朝堂院の東西幅が非常に狭いことが確認されているだけでなく、朝集殿院の南北長も従来の想定より長くなることがわかっています。今回の成果により、朝堂院の南北長が、さらに狭くなってしまおうというのが問題として残ります。『続日本紀』には天平 16 (744) 年の正月元旦に朝堂に官人かんじんを集めたという記載があります。朝堂は平城宮では 12 堂、難波宮では 8 堂が配置されていたことがわかっていますが、恭仁宮の場合は何堂が配置されていたのか、今後の調査で明らかにしていく必要があります。

今年度の調査では、残念ながら、見つかった遺構が少なく、遺存状況も良好ではなかったため、確証を得ることは出来ませんでした。今後の調査の手がかりとなる重要な成果を得ることができました。今後の調査をさらに進めることにより、恭仁宮の正確な規模が明らかになると、他の宮との設計思想の違いや、どの宮を手本として設計したのか、大極殿院や朝堂院の性格や機能は何かなど、多くの議論を具体的に検討することが可能となります。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、
各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
